LSHTM 留学近況報告

加藤　隼悟

熱研内科のホームページに寄稿するのは随分と久しぶりになってしまいましたが、留学中につき近況報告させて頂きます。私は今年度（2012-2013）、英国のロンドン大学を構成する学校の一つである London School of Hygiene and Tropical Medicine（LSHTM）の熱帯医学修士課程（MSc – Tropical Medicine & International Health）に留学しております。幸いにも今年度は当科から土屋先生も LSHTM（MSc - Epidemiology）に留学されていて、大変お世話になっております。土屋先生のレポートも是非御拝読下さい。

思えば 2009 年度に熱研内科から 2 ヶ月間フィリピンのサンラザロ病院で感染症研修に行かせて頂いたのが、初めての臨床熱帯医学経験でした。あの時は英語でのコミュニケーションの難しさと、貧困と感染症の入り組んだ臨床現場における自分の無知無能さを痛感するばかりでした。その際にプライマリケア能力、総合診療力の重要性を再認識し、2 年間北海道の江別市立病院総合内科で勉強させて頂きました。同時に英語の勉強にも苦しみながら挑み続け、去る 9 月にようやく LSHTM に滑り込むことができました。

LSHTM についてはこれまでも多くの先生方が熱研内科のホームページで紹介されていると思います。有吉先生をはじめ鈴木先生、濱口先生、島川先生、高橋先生、土屋先生と、ここで学ばれた方は多く、先生方の記述からもその素晴らしい学習環境と経験が感じられるかと思います。また、熱研内科は例年 LSHTM から先生をお招きして講義をして頂く貴重な機会がありますので、そちらのレポートも参考になるかと思います。ともかく、LSHTM は歴史、研究実績、優れた指導者が多いという世界最高峰の熱帯医学教育機関なのだと感じられます。毎週 Global Health を議論するセミナーやカンファレンスがあり、時には世界的スペシャリストの揃う国際的なカンファレンスや、Lancet の編集者達とのディスカッションといった熱帯医学・国際保健におけるアカデミックな最前線を身近に感じられます。

LSHTM の学生は Research course（いわゆる PhD）、Master course（Master of Science, Master of Public Health）、Short course（Diploma や単科受講）に分けられますが、Master course が特に多彩で学生も多いです。詳細は LSHTM のホームページを是非ご覧ください。私の通う MSc-TMIH コースは医師限定の臨床重視コースで、同時に Diploma in Tropical Medicine & Health (DTMH)も取得できるのが特色です。Master course はいずれも 3 学期約 8 ヶ月間の講義と実習の後で 3 ヶ月程度のうちに自ら選んだ研究テーマを元に修士論文を作成し、評価を受けることになります。講義は選択の幅が広く目移りしますが、私は臨床感染症系のものを中心に選び、他に疫学、臨床研究、AIDS に関する講義を選択しました。Term 1 では寄生虫・病原動物学、EBM や医療統計の基礎が必修で、講義と実習のほかにグループワークやプレゼンテーションを行います。これは英語力が要求され、特に帰国子女でもなく留学経験もない自分には苦しい関門でした。幸か不幸か同じコースには日本人どころか東アジア・東南アジア人は一人もおらず、一人で苦戦していても皆が優しくて助かりました。試験も大きなプレッシャーで、特に記述試験は大変です。一問につき一冊の解答冊子が

与えられ、山ほど書かないといけないようです。問題は選択できるので、敢えてエッセイではなく数式で許される統計、疫学系と臨床問題で挑む戦略を練っているところです。他には Term 毎に選択教科の試験や顕微鏡の実習試験もありますが、選択枝が与えられたり Short answer だったりで、英語に苦しむ度合いはマシです。

MSc – TMIH コースの目玉は何と言っても臨床系講義だと言えます。Term 1 では週に一日は University College Hospital と隣接する熱帯病病院で Clinical Case Study の日があり、各国から来ている臨床家と議論しながら学ぶ機会があり、TMIH ならではのセッションでした。ただ、ロンドン自体は熱帯地ではないので、Case Study は主に過去の症例をスライドや Paper-based の教材で検討することになります。熱帯感染症の患者さんは旅行者や留学生も多いですが、南アジアやアフリカ系移民とその家族がかなり多く、時には集中治療を要するような重症マラリアやアフリカトリパノソーマ症（ねむり病）、リーシュマニア症など様々なケースがあるようです。Term 2 では 3 カ月間の DTMH コースと合同でみっちりと臨床感染症、感染制御、国際保健に関する講義を受け、3 月末に Master degree とは別に Diploma の試験もあります。過密スケジュールで Master course の課題も並行して行うため、最も過酷な 3 ヶ月間と言えそうです。試験自体は選択式問題なのがせめてもの救いですが、非ネイティブの凡人には辛い試練です。これを乗り越えれば最後の Term となり、最後に 6 月初めの 2 日間の総合試験を終えれば残りはサマープロジェクトです。TMIH コースの場合プロジェクトに制限はなく、自由にテーマを選べます。クラスメイトは既に MSF や NGO 団体で熱帯医学の経験を積んだ人や、臨床研究の経験がある人、感染症のスペシャリストなども多く、約 30 人のうち卒後 5 年以内の若手は 10 人前後です。そのため、皆自分の経験に関連するテーマでプロジェクトを行うことが多く、世界中様々なところに散っていきます。内容は 3 カ月で完成するものとなると、literature review, data analysis, research proposal, 小規模な臨床研究（症例対照研究、横断研究、質的研究など）などがよく選ばれるようです。各学生には教員が通年の個人チューターとして割り当てられており、プロジェクトについてもチューターに相談しながら決めることになります。テーマによっては学外のスーパーバイザーを紹介してくれることもあり、基本的にプロジェクトのテーマは学生の希望が尊重されます。私も DTMH の試験が終われば本格的にプロジェクトの準備を進めないといけません。

あっという間に 5 カ月が過ぎてしまいましたが、この贅沢な環境で存分に勉強しないともったいないと焦ってばかりです。授業料は年間 2 万ポンド弱（1 ポンド 140 円で約 280 万円）と高いですが、学習環境は充実しています。講義の資料や必要なソフトウェアは全て学内のコンピューターから利用可能であり、学外からもインターネットで学内コンピューターへのアクセスが可能で、学生は文献や高額なソフトを熱帯地域からでも利用可能です。他にも IT スキルや英語力トレーニングの課外授業もあり、世界中から集まる様々な学生をサポートする体制が整っています。私のコースも半分はイギリス、アイルランド、北米、豪州出身ですが、アフリカ 8 人、中南米 3 人、その他欧州が 3 人、アジア 2 人という多彩な顔ぶれです。経験もバックグラウンドも様々で、英語についていくのは大変ですが、志の高い人たちと苦楽を分かち合い仲良く学習できるのは貴重な経験になります。

末筆ですが、このような貴重な経験をさせて頂くに際して、熱研内科の先生方に多大な御支援を頂いていることを心より感謝申し上げます。特に、有吉先生、濱口先生ならびに江別市立病院長の梶井先生の御支援なくしては有り得ないことで

した。有難うございます。今後も多くの方が LSHTM で知識と仲間を得て、長崎や世界中で活躍されることを祈念しております。自分も無事に卒業して、修得したことを長崎でも活かせるように頑張ります。